

第 1 7 期第 2 回青森県生涯学習審議会 会議概要

日 時	令和 7 年 1 月 2 3 日（木） 1 3 : 3 0 ~ 1 5 : 3 0
場 所	青森県庁北棟 7 階 7 0 9 会議室
出 席 者	《 委 員 》 敬称略 1 3 名 千葉 栄美 吉川 康久 小野 淳美 米田 大吉 岡 詩子 岩本 ヤヨエ 米沢 美幸 小笠原 秀樹 工藤 貴子 越村 康英 松浦 淳 高砂 充希子 山崎 結子 《 事務局 》 9 名 小舘 孝浩（生涯学習課長） 西塚 努（学校地域連携推進監・課長代理） 工藤 奈保子（生涯学習課 企画振興グループ 総括主幹） 中村 尚吾（学校教育課 課長代理） 他 5 名
内 容	1 開 会 2 案 件 （1）審議事項に係る現状認識や課題等について （2）その他 3 閉 会
配 付 資 料	次第・青森県生涯学習審議会委員名簿・座席図 <資料> 1 審議事項に係る県内外の取組事例について 2 資料 1 で紹介した取組事例に係る補足資料について 3 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール 《参考資料》 1 諮問書 2 第 1 回会議における意見の整理

1 開 会

(内容省略)

2 案件

会長 今日の会議から諮問内容に関わって具体的な議論を進めていくことになる。委員の皆さんには、それぞれのお立場から忌憚のない御意見をお願いできればと思う。

会長 案件に入る前に、前回の会議を欠席されたお二人の委員から簡単に自己紹介をお願いしたい。

委員 県立高校の校長をしている。生涯学習や社会教育を推進する上で、学校教育の担う役割は大きいと考えている。特に高校生はこどもと大人の中間にあり、彼らが学ぶことの意義を考えたり、学ぶことの楽しさに気付いたり、さらには地域の素敵な大人と出会い、憧れを持ったりできることが重要であり、そういったことにつながる行政やNPO、地域の方々などが関わっている取組を知ること、彼らの生涯教育や社会教育への意識を育てることに役立つと考えている。

委員 県内の自治体で教育長を務めている。昨年まではコミュニティ・スクールを導入した県立高校の校長を務めていた。自治体の教育長としては、小・中学校の教育全般と社会教育施設の運営に関わっているので、そういった面で有益な情報を提供できればと思う。

会長 それでは、案件（１）審議事項に係る現状認識や課題等について、事務局より説明をいただきたい。

(事務局から説明)

会長 事務局の説明に対して質問があれば伺いたい。

(委員からの質問等はなし)

会長 それでは、取組事例を紹介いただいた委員から補足説明をいただきたい。

委員 中泊町の「集落支援員を中核とした小規模多機能自治」について補足する。この取組を進める上での課題としては、関わってほしい人がしっかり参加できるようにすること、同じような価値観の人同士で終わらないようにすることを考えていたので、個々のテーマや世代で一括りにせず、課題の解決に向けてどう取り組むかを集落ごとに集落支援員に任せることにした。そうしたところ、「自慢大会」という取組につながり、さらには中学生を含めたアンケートを実施し、若い世代も巻き込んだ取組に広げることができている。もう一つ付け加えると、こどもたちの地域愛をどれだけ育んだとしても、こどもたちを地域にとどめさせておくことは難しく、その要因の一つと

して、一部の高齢の方の旧態依然とした考えや地域のしきたりがあると考えている。そのため、そういった考え方などが少しでも若い世代に寄り添ったものにしたいということも、この取組のテーマとして考えている。

委員 野辺地町の「ふるさと学習」について補足する。野辺地町では、5年ごとに教育振興基本計画を作成しており、郷土を愛する心と人材の育成を基本政策に挙げている歴史文化芸術分野の取組の中に審議事項と重なりところがあり、今回紹介させていただいた。資料2の5ページがその取組の体系図となり、校種をまたいで小中高の先生方にこの取組をより知ってもらいたいという意図もあって作成することになった。ふるさと学習では、小学校低学年では生活科の時間、中学年以降は総合的な学習の時間で実施しており、小1ではのへじふるさとカルタの贈呈、小3ではハッチョウトンボ観察会、こかぶ植え付け、小4では河原決明（かわらけつめい）というお茶になる草の種付け等の体験、小5では町内の施設巡り、郷土料理の調理実習、祇園まつりの学習、小6では函館への修学旅行での町のPRといった取組を行っている。また、小中高生を対象に平成30年度から「のへじ検定」を実施しており、町の歴史を再認識する機会となっている。中学校と高校の取組では、野辺地高校の2年生が学習の成果を中学生の前で発表する機会を設けており、校種間で連携して実施している。

委員 「女性防災リーダー育成プログラム」について補足する。この取組は、審議事項3との関連が強く、育成した女性防災リーダーがこどもたちの地域学習や地域活動に関わっていくイメージで捉えている。追加資料としてお配りした冊子では、修了生の今後の防災活動へのビジョンが紹介されており、名刺代わりに持ち歩いて活動に生かすといった工夫がされている。また、一緒にお配りしたチラシでは、防災カフェに関するイベントが掲載されており、そのイベントの中では3名の修了生がそれぞれの活動を発表する機会を設け、活躍の機会をつくっている。「自助・共助・公助」という言葉があるが、実際に災害が起こったとき、地域のつながりがなければ、その中の「共助」は機能しないものである。そのため、我々が行っている防災に関する活動では、地域のつながりを特に大事にしており、地域がつながる中で、こどもたちの地域学習や地域活動への関わりも生まれてくると考えている。

会長 「OH!! 鰐 元気隊キッズ」について補足する。バブル崩壊後、大鰐町の財政が非常に厳しく、破綻寸前までいった段階で、町に対しての自信、誇りを取り戻すため、そして町のマイナスイメージがこどもたちに伝播するのを防ぐために、町民の有志が立ち上がり、こどもたちも巻き込んだ取組に発展させている。こどもたちは清掃活動や東京での販売体験などの活動の中で、町の良さを知るとともに町の魅力をPRする体験をし、町への愛着を深めている。この取組の大きなポイントは、長年にわたって継続されていることだと考えており、元気隊キッズの一期生が現在は20代になり、少しずつ町に戻り、地域を支える存在になっている。時間をかけて、そのようなサイクルを生み出していくことも、今回の諮問に答えていくための重要な視点と考えている。

委員 補足する前に全体的な話をすると、今回の取組事例については、教育基本法における民主的な社会の形成者の育成というところを重要な視点と捉え、社会に主体的に関わっていく人材育成につながる事例を3つ紹介させていただいた。

まず、一つ目の「レスタ」については、寺子屋の取組が特徴的で、以前は総合社会教育センターで活動していたが、コロナ禍を経て、現在は一軒家を借りて活動してい

る。その活動の中では、小中学生が大学生のメンバーと話をする中で、いろいろな遊びにチャレンジし、失敗することもあるが、試行錯誤しながら活動する場所として機能しているところが大きなポイントだと思う。少し上の世代の大学生が見守る中で、安心して失敗できる環境があることは、自分と地域のつながりを意識できる場所としても機能していると思う。

二つ目の「クリエイイト」では、かつて活動に参加した高校生が大学生、さらには社会人に成長し、再び活動をサポートする側として戻ってきて、現在の高校生の活動をサポートしている。参加している高校生は、彼らに親身になって話を聞いてもらいながら、地域活動を実践することで、自分たちの考えがまちづくりに生かされていることを実感することができる。

三つ目の「千刈小学校PTA」については、自身の仕事の関係で足を運ぶ機会の多かった千刈小学校において、保護者の出入りが他の学校よりも多いことに気づき、様々なPTAの取組があることを知った。特徴的なものとしては、段ボール迷路、ビンゴ大会などを保護者が協力して実施するふれあい村という取組があり、大人たちが楽しそうに子どもたちと関わる姿を意識的に見せているところが大変印象に残っている。

委員 「うらほろスタイル」について補足する。この取組は全国的にも大変有名な事例だが、簡単にまねできないので注意が必要である。先ほどの大鰐町の取組と同様に、町が窮地に陥り、それまでのやり方を一変させることについて、町全体の意思統一ができたところの成果だと思うので、状況の異なる他の自治体ではそのまま取り入れることはかなり難しいと思う。ただ、子どもたちの意思を尊重しながら、地域の大人がちゃんと伴走している姿勢は見習うべきである。また、この取組のすごいところは、活動の魅力に惹かれて多くの若者が町に流入していることである。

会長 私からも「うらほろスタイル」について補足する。この取組が社会教育関連の冊子に取り上げられた際には、次のような記述がある。「このうらほろスタイルが目指しているのは、浦幌の持続です。そのために必要なこととして、次世代を担う子どもたちがこの町に生まれ育ってよかった、自分が引き継いでいきたいと思えるような地域を大人たちが作っていくことをしています。こうした目標を掲げると、これは子どもたちを地域の外に出させないことを目指しているのかと誤解される向きもありますが、決してそうではありません。まずは子どもたちを地域みんなで愛していくことを大切に活動しています。」ということはこの活動に関わっている方が述べていて、地域の中に子どもたちをとどめようとしているわけではなく、まずは本当に地域みんなで地元の子どもたちを大切にしようとしている。これは大変重要なポイントであり、前回の会議では、「大人の下心のようなものが透けて見えないようにしなければならない」という趣旨の発言があったが、この取組の姿勢から多くのことを学べると考えている。

会長 さらに続けて「ねこまろ」について補足する。千葉県袖ヶ浦市では、成人式をそれぞれの地区の公民館で実施しており、根形地区での成人式に参加した若者から「地域のために何かできないか」との提案があり、公民館職員がそれを受け止めて形にしたのがこの取組である。公民館と小学校が連携をしながら、そこに地域の若者が関わって、夏休みを中心に、子どもたちを対象に様々な活動の機会を提供している。元々は若者中心の活動だったが、そこに地域の大人たちも支援者として関わるようになり、

今では地域の多世代の交流の機会に発展している。個人的には素朴な取組との印象を受けているが、意外と公民館と地域の学校というのはつながれる可能性があることに気づかせてくれる重要な取組と考えている。

会長 取組事例の補足については以上となる。質問等があればお願いしたい。

委員 「千刈小学校PTA」について確認したいことがある。学校における取組は、前年度に予定がほとんど決まっている状況だと思うが、ふれあい村の日程は、どのように決定しているか。また、キーパーソンとなる人がどのくらい関わっているのか。

委員 基本的には日程は保護者が学校側と調整しながら決めていると思う。時期的には例年、7月中旬の日曜日に行っている。キーパーソンとなる方が重要な役割を果たしていることは事実だが、その方の熱意が周囲の人たちにも波及していて、全体的に大きなエネルギーとなって活動を支えている印象を受けている。

委員 生涯学習・社会教育に関する活動では、やはりキーパーソンからの波及効果が大きいので、そういった人材を見つけることや育てることが重要だと思う。

会長 他に質問がないようなので、ここで休憩とする。

(休憩)

会長 それでは再開する。会議の後半は、3つの審議事項についての意見交換となる。実質的に今回が最初の会議となるので、ざっくばらんに幅広く御意見をいただきたい。3つの審議事項については、それぞれ内容が重複したり、関わったりしているので、特にその区切りをあまり意識することなく自由に御発言をいただければと思う。

委員 先ほどの取組事例を含めて意見を述べさせていただく。8年ほどアメリカで暮らしていたことがあり、地域活動について日本と比較すると、日本はどちらかというと「ムラ意識」が強く、地域内でまとまって活動するといった傾向が見られるが、アメリカは移民が多いということもあり、地域の外からも多くの人に参加しやすい環境が整っていると感じた。実際、日本に戻ってきてから地域の祭りに参加してみると、よそ者扱いされているような感じがあり、3年かけてようやく打ち解けてもらえた気がしている。先ほどの北海道浦幌町の事例では、活動の魅力に惹かれて多くの若者が町に流入しているとの話があったが、やはり外から人が入ってきやすい状況をつくることが重要だと思う。また、大鰐町の事例では、大人が町の悪口を絶対に言わないことを徹底しており、取組を進める際に見習うべきことだと思う。審議事項1については、先日、八戸市内で空き家を活用したトークイベントを開催した際に、100人くらいの参加者を収容できる会場を探すことになり、結果的に吹上小学校を会場とすることになった。その中では、他県の人と地域の人とが交流し、お互いの言葉や気質の違いに気づく機会となっていた。公民館や小学校などに地域の外から人が入ってくことで、自分たちが暮らす地域について見直す機会となるので、地域愛を深めるためには、活動を積極的に外に開くことが重要だと思う。

委員 津軽と比較すると八戸市は外に開かれていると思うが。

委員 確かに八戸市は外から入ってくる人は多いと思うが、長く地域で暮らしてきた人の中には、「俺たちのやり方に外から来た人がごちゃごちゃ言うな」といった意識の方も一定数いるので、そういった方々の意識をどのようにくみ取るのかも重要だと考えている。また、津軽の人はニューヨーカーのような印象があり、嫌なことがあればそれをすぐに相手に伝える特徴があると思うが、南部の人は嫌なことがあっても、それをあまり言わないような気がする。ただ、両者の特徴に表面的な違いはあるが、本質的にはあまり変わらないと思っている。

委員 八戸市の印象としては、外から来た人に対して、開かれている人もいれば、開かれてない人もいるので、結局はその人の意識の問題だと思う。ただ、今年は特に雪が多いが、津軽には雪片付けの問題があり、普段から近所の人たちとコミュニケーションが取れていないと生活が成り立たないこともあり、地域内でのいわゆる「ムラ意識」のようなものが形成されやすいと思う。そして、それは地域内で長年にわたって培われてきているものなので、もはや遺伝子レベルでの性質になっているとも考えている。

委員 地域内における人々の意識が遺伝子レベルで形成されているという部分には共感できる。八戸市はさほど雪が降らないが、それでも朝から雪かきをしていないと地域の人たちから白い目で見られるようなところがあり、地域の中で足並みがそろっていないことに対して、地域の人たちの目が厳しいようにも感じている。芸術の分野では、障がいのある人も健常者と一緒に活動することが多くなってきているが、それまで地域で培われてきた単一的な考え方を一度柔らかくして、外から入ってきたものを自然と受け入れる地域性に変容していくことを期待している。

会長 自然的な背景を含めた地域性が人々の意識に与える影響は大きいと思うが、一方で多様な考え方が地域にあることにもしっかりと目を向ける必要がある。また、地域づくりでは、「よそ者、若者、ばか者」という言葉をよく耳にする機会があり、地域のことを地域内に閉じず、外から来た人を受け入れていくことも重要である。

委員 地域の外から新しい視点を取り入れることと、地域の人たちが地域のことをしっかりと担っていくことは、決して二項対立することではないと考えている。地域づくりにおいて、長く地域で暮らしてきた人が積極的に関わろうとすることは自然なことであり、一方で「よそ者、若者、ばか者」が唯一無二の答えではない。大事なことは、すぐに答えを出したくなることにいかに抵抗するかということである。前回の会議でもお話したが、若者が県外に移り住むことになっても、移り住んだ先でいろいろなことを経験する中で地元の良さを再認識して戻ってくることもあり、その時点で行動の良し悪しを判断することはできない。また、外から新しい人が入ってくることは、それまでの地域の考え方に影響を与えて、もう一度その考え方を改める機会になったりもするので大事なことである。大人の事情といったことで、すぐにそれなりの結論を出さなければならないことも少なからずあるが、地域愛を育むためには、急いで答えを出さないで、形になるまで待つということが大事だと考えている。

委員 私の知人に北海道出身で、大学は弘前で学び、その後縁もゆかりもない東通村に移り住んだ人がいる。東通村では、地域の大人たちから手厚い支援を受けたこともあり、彼は現在、結婚してお墓も立てている。そういったことから、やはり地域の中に若

い人を育てていこうとする意識がなければ、地域の外から来て、新しい視点をもたらしてくれる人は地域の中で生きようがないと思う。若い人たちにチャレンジが許される環境があれば、それが出番につながり、さらには居場所になり、地域への愛着が育っていくことになると思う。

委員 私は県外出身者で、県内に移り住んだ当初は地域のことをほとんど知らない状況だったが、PTA活動の中で積極的に地域活動に誘ってくれる方がいて、そういった方々のおかげで、多少ためらいながらも様々な地域活動にチャレンジすることができたと思う。また、その姿を子どもたちが見ていて、その影響からか、子どもたちも積極的に新しいことにチャレンジしていくようになったと感じており、新しいことにチャレンジする大人の背中を子どもたち見せることも重要だと考えている。

委員 チャレンジする大人に関連した話では、会議前半の取組事例にあった「OH!! 鰐元気隊キッズ」に関わったことがあり、私はファシリテーター的な存在として活動に寄り添ってきた。地域性に関しては、「津軽の足引っ張り、南部の手引っ張り」という言葉もあるが、その活動が始まった当初は孤立無援といってもいい状況で、20名弱のコアメンバーは活動資金もほばないまま、地域の人たちに呼び掛けて決起集会を行うことになり、その結果、約200名の町民が集まった。ただ、それで町全体が一つにまとまったかというとなんかそう簡単ではなかったが、子どもたちも巻き込んだ取組に発展させ、世代間を超えた結びつきが生まれたことにより、町全体として前向きになった印象を受けている。東京での販売体験では、子どもたちも名刺交換を行っており、その準備段階で、大人たちは子どもたちに大鰐町の良さをしっかりと伝えるという仕掛けがあり、子どもたちは町に対する印象をポジティブなものにしている。現在では、活動初期の子どもたちが地域に戻ってきて活動を支えており、継続した積み重ねやその中で大人からの仕掛けの重要性を強く感じている。

委員 先ほどの話に合ったチャレンジが許される環境かどうかは大変重要なポイントだと思う。我々の時代は人前で怒られることもよくあったが、最近の若い人たちはそのような経験がほとんどないため、地域住民からのクレーム等に対応した若手の職員の中には、精神的に大きなショックを受ける人も見受けられる。また、上司からの指示を1回で理解できなかったとき、改めて聞くことをためらう若手の職員も多いと聞いている。その背景としては、社会に出る前にチャレンジして失敗する経験が不足していることが考えられるので、幼少期からいろいろなことにチャレンジできる環境が身近なところに必要である。一般的に、大人は子どもたちに対して、失敗しないように、しかも最短距離で正解にたどり着かせようとする傾向が見られたりもするので、いい意味で失敗が許される機会を提供するため、社会教育が担う役割は大きいと感じている。

委員 学生に対する指導においては、遊びの大切さを伝えることが多い。遊んでいないと自身の好みや得意分野、興味関心などが見えてこない。遊びの中では、当然失敗することもあるが、逆にその経験が自分の特性を知るきっかけとなる。失敗と聞くとネガティブな印象を持つ方もいると思うが、遊びの中での失敗は、次のチャレンジへのワクワク感につながったりもするので、主体性や積極性を育むことにもなる。施設の話になるが、沖縄県にある若狭公民館では、学習プログラムを年間で20～30ほど企画し、残らないものも多くあるが、実際やってみて楽しいものをどんどん見つける工夫をし

ているそうである。そういったことから、大人たちがどんどんチャレンジして、どんどん楽しんで、こどもたちを含めてたくさんの人たちを巻き込んでいくと、たのしさの連鎖、ワクワク感の連鎖が生まれ、こどもたちに多様な経験をさせる機会の提供につながると考えている。

会長 こどもたちがチャレンジできる環境を保証することは大変重要なポイントである。最近の研究では、PDCAを見直す動きもあり、4つのサイクルの中のC（check・チェック）が活動を小さくまとませる可能性があると言われていると指摘されており、その一方で注目されているものが、AAR（anticipation/アンティシペーション・action/アクション・reflection/リフレクション）と呼ばれるものである。これは、ある程度の見通しを持つ、見通しを持ったらやってみる、やってみたらどうだったか振り返ってみるといったサイクルである。目先の評価に委縮することなく、楽しいことやワクワクすることを思い描きながらどんどん実践するサイクルを地域でも回していくことで、地域における豊かな学びや地域の活性化につながると考えている。

委員 審議事項1に関して意見を述べさせていただく。長く続いている地域活動については、活動があることによって、その場所が使われているという捉え方もあるが、逆にそういった場所があるから継続的な活動が生み出されていることもあると思う。意外と活動場所が確保されていることの重要性については見落とされがちで、活動できる場所があるからこそやれることもあるので、そういったことから公民館を始めとする社会教育施設の役割は重要である。10年くらい前の話になるが、文部科学省の方から、外国では地域住民が気軽に集える日本の公民館のような施設が高く評価されているという話を伺ったことがあり、外国では公民館の機能に注目している国も多い。現在の日本では公民館が廃れていく傾向にあるが、その必要性を情報発信するとともに、学校外で活動を行う際にもっと気軽に公民館等の社会教育施設を利用できるように、施設の一覧がインターネット上で確認できるようになっているとよい。

会長 場が重要であるということについて全く同感である。今の話にあったように、世界の中で公民館はかなり注目されていて、コミュニティ・ラーニング・センター（CLC）という形でアジアの国々にも広がっており、地域における学習の拠点になる施設を、地域の中にしっかり位置付けていくことも重要である。

委員 今日の会議で、一部の高齢の方の旧態依然とした考え方を変えていかなければならないという発言が特に印象に残っている。以前、家庭教育支援に関する研修会で、感謝の言葉を伝えようというテーマで「親学プログラム」を実施したことがあり、70代くらいの男性の方が、「私は必死に家族を養ってきた。自分以外の人に感謝の気持ちを伝えることは考えられない。」といった趣旨の発言をしていた。現在は夫婦共働きの世帯がほとんどで、家庭環境も大きく変わってきていると思うが、地域においても世代を超えて、相手を理解することが必要になってきていると思う。

委員 地域への愛着や誇りについては、やはり人によって様々な違いがあるように見える。高齢の方々は、地域外の人間が地域づくりに携わることがほとんどないと思う。そのため、「自分たちが」という意識が強く、今の時代とかみ合っていない部分もあると思うが、それはそれでかなり強い地域愛があると思う。私はねぶたに関連する活動に関わることが多く、その活動の中には、「自分が青森なんだ」ぐらい、地域愛の深い

人がたくさんいて、頑固に昔ながらのやり方を押し通す傾向も見られる。ただ、そういった方々を含めての地域だと思うので、それぞれの世代の人たちが持っている地域に対する思いをわかり合える機会があるとよい。

委員 学校現場からの話をさせていただくと、先生方は生徒の成長のために最善を尽くしていることに加え、保護者からの期待を考えると、どうしても成功を前提とした活動になってしまうことも御理解いただければと思う。また、本日の会議の中で、大人は町の悪口を言わないというルールを徹底している大鰐町の取組に大変感銘を受けており、地域づくりを進めていく際の重要なポイントだと思う。規模の大きい自治体はいろいろな取組を行うこともできるが、小さい自治体は高齢の方々が多くなっているのので、地域の外から入ってくる人や地域おこし協力隊といった人たちをどのように活用していくかといったことも大事な視点である。

会長 それでは、案件（２）その他に入る。事務局から今後のスケジュールについて説明していただきたい。

（事務局から説明）

会長 その他、意見が無ければこれで今日の会議を終了とする。

3 閉 会

（内容省略）